

モジュール化する多民族社会：情報技術の進歩がもたらす社会変化の一面

篠崎，彰彦
九州大学大学院経済学研究院：教授

<https://hdl.handle.net/2324/1685847>

出版情報：学際. 6, pp.85-88, 2002-09-30. 統計研究会
バージョン：
権利関係：



モジュール化する多民族社会

～情報技術の進歩がもたらす社会変化の一面～

篠崎 彰彦



◇ はじめに

テロ事件から1年が過ぎた。事件直後の報道によれば、世界中に散在するテロ・グループが、豊富な資金力をもつ中心人物にネット経由で様々なテロ計画を提案し、実効性や衝撃度を勘案した上で、遂行能力の高い実働部隊が編成されたという。これはまさに、技術力のある起業家とベンチャー・キャピタリストの連携が経済の新領域を切り拓いた「シリコンバレー・モデル」そのものである。

それにつけても、昨年のテロ事件とその後の動きをみて感じるのは、情報技術の進歩が社会に及ぼす影響の深さである。真偽のほどは定かでないが、上記の話があながち嘘とは思えない世界を迎えている。

◇ モジュール化する社会

事件直後を振り返ると、ボストン近郊に在住する日本人の多くが、当地

の報道番組や新聞にも増して、インターネットにアクセスし、日本経由の報道で詳細な情報を入手していたようであった。私も同様であったが、この状況に浸りきっていると、まるで日本にいる自分が、身近に起きた筈のテロ事件を画面の向こう側に見るような錯覚をおぼえた。この時の私は、身体は米国に存在していても、情報が渦巻く頭の中はいわば日本に存在しているのと同じであったが、改めて日常を見渡してみると、どうやらこれは特殊なことではなさそうである。近所で親しくしているアラブ系の米国人一家は、衛星を通じて中近東圏の放送を常時視聴しているし、私の研究室の隣にいる多くの中国人研究者は、毎日インターネットで中国の報道に触れている。

情報技術の進歩がもたらすこの現象は、社会の「モジュール化」を促すと考えられる。モジュールとは、専門に特化された自律的なサブシステム(部品)のことである。その内部は高度に特殊化され、ブラックボックス化するが、簡明な共通ルールをインターフェースに用いれば、相互の連結は容易に行うことが可能となる。各モジュールが専門性を発揮しながら、全体として複雑なシステムを有機的に進行できる仕組みだといえる。多民族社会の米国は、これまでも多かれ少なかれこうした特徴を備えていたし、それがこの国の活力源でもあった。

街では個性豊かな様々な民族の人々を見かけるが、スーパーでの買い物ひとつをとってもわかるように、日常生活は簡明なルールで共通化されており、そこで各民族に固有の文化が衝突して摩擦を起こすようなことは稀である。その反面、こうした表面的なやりとりからは、一步踏み込んだ複雑な内面を窺い知ることもできない。面倒なコミュニケーションの必要が薄れるために、異質なモジュールとの対話は極端に単調なものとなるからである。それは現代社会が効率性の追求と引き換えに失った「何か」かもしれぬ。

◇ 情報ネットワーク社会の陥穽

厄介なことに、人間は機械のように冷めた存在ではない。意識や感情といった頭の中の世界が現実の認識にも大きく影響する。人間は自分勝手な想像だけで不安になったり、喜んだりできる熱い存在なのである。ブラッ

クボックス化したモジュールの中で形成された特殊な意識が先鋭化していくと、時には過激な行動が生まれることもあるだろう。

この点で、寛容な移民政策をとってきた米国には、従来から反米的なテロリストが一般市民を装って潜伏していただろうが、散在するテロリストの活動は限定的、散発的なものにとどまり、情報機関や捜査当局など「国家機関」の枠組みで制御が可能と考えられてきた。ところが、情報技術の進歩はこの構図さえも書き換えた。

個人がバラバラに散在している状態では発揮できない能力も、束ねることによってパワーに転換できる。それを可能にするための大掛かりな仕組みが、これまでは巨大企業や政府といったフォーマルな「組織の形成」であった。だが、「時間」と「空間」だけでなく「組織」の枠を越えて情報が行き交い、意思決定が促される情報ネットワーク社会では、個人の閃きやアイデア、思想や感動といった意識活動が従来型の硬い組織に依らずとも自由に行えるため、官僚主義などの弊害を回避しながら、散在する個人の力を束ねて大きなパワーに転換することが可能となる。国際社会でNGOが各国政府に匹敵するほどの影響力をもつようになったのは、その良い例であろう。

しかし、これが悪意と恐怖に満ちた活動に利用されたらどうなるか。モジュール化されたブラックボックスが破壊のためのネットワークで連結されたとき、予想を越えたテロ活動が時間と国境を越えて有機的に結びつき、実行可能となるのである。米国が建国以来経験したことのない中枢部の攻撃を受けたことで、ネットワーク化されたテロリスト集団の威力が、フォーマルな軍事・防衛力の間隙を突く変幻自在の存在であることをみせつけた。

◇ 続けられる「生の対話」への努力

確かに、インターネットの普及はコミュニケーション革命を起こした。しかし、それが異質なモジュール相互間の対話ではなく、同質的なモジュールの閉じた連携を濃密にするだけに終われば、多民族社会を構成する多様なモジュールは、ますますブラックボックス化していくことになるだろう。この陥穽にはまらないためには、コミュニケーションを単調で冷めた

ものだけに終始させず、潤いと温かみのあるものに変えていく努力が欠かせない。それをつきつめていくと、結局は相手の顔をみながらの「生の対話」を深めることに行き着く。

米国社会は、実はこうした努力も積み重ねている。テロ事件の数時間後、私の研究所が属する大学からも、娘達の通う現地の小学校と中学校からも直ちに精神的なケアのためのカウンセリングの連絡が入った。下の娘が通う小学校では、校長先生自らが、児童を迎えにきた保護者の輪の中に入り、子供との接し方などについて直接アドバイスをしてくれた。数日後、地元の高校では追悼のためのミサが執り行われた。さらに数週間後、研究所ではイスラム教徒のある女性研究者を外から招き事件について話し合う小会合を開いた。こうした人と人との直に接する「対話」の会合は様々なレベルで開かれたが、大学をはじめとする教育機関が、地域社会の中でこうした「対話」を作り出す中核的な「場」となっているのも印象的であった。

◇ おわりに

日本でも、一昔前には考えられないような不可解な事件が相次いでいるようだが、気がつかないうちに、均質と思われてきた社会がモジュール化しているのかもしれない。多様性の受入は社会の活力を高めるためにも望ましいことではあるが、同時にモジュールのブラックボックス化という陥穽についても考慮する必要があるだろう。そして何より、迎えつつある情報ネットワーク社会では、パソコン操作術の訓練以上に、人間としてのコミュニケーション能力を磨くことが強く求められる。ひいては、それが憎悪にもとづく悲惨な事件の抑止にも役立つと考えられるのである。

(しのざき あきひこ 九州大学大学院経済学研究院、現在ハーバード大学客員研究員)